

## ぼくのスーパーマンへ

藤丸 泰志ふじまる たいし

「たいし、お母さんとおうちのことをたのむね。」

ぼくの父は、自えいかんです。いつも父は、はげんめいれいや長いくれんに行く時は、こう言ってぼくをだきしめてから家を出て行きます。ぼくは、この時が一番きらいです。がまんしているけど、どうしてもなみだが出てしまいます。

自えいたいの仕事は、日本の平和と安全を守ることです。日本国中のこまっっている人たちをたすけます。

ぼくが生まれてすぐにおきた、東日本大しんさいの時には、ひさい地から二ヶ月も家に帰ってこなかつたそうです。ぼくは、なにもおぼえていないけど、テレビで見た時、とてもびっくりしました。こんなことがおきてたなんてしんじられませんでした。人がすんでいたところじゃないみたいですがたになってました。

そこで父は、人めいきゅうじょや行方ふ明になっている人をさがしたり、がれきをユンボでとりのぞいたりしていたそうです。ぼくは、そんなげん場に行ってこわくはないのか父に聞いてみました。すると、

「お父さんたちが行かないと、こまっっている人たちをたすけれないからね。」

と、しんけんな顔で答えてくれました。

父は、夜、ぼくたちがねている間に出て行ったり朝早くに出て行ったり、一ヶ月の半分くらい家にはいないこともあります。その間、母が一人でぼくたちのことを見てくれます。いそがし

い時、母は、

「あー。お父さんがいてくれたらなあ。」

とさみしそうな顔をしています。そんな母の言葉を聞いたり自えいたいの話を開いたりして、父は、ぼくたちにとっても日本中のこまっっている人にとってもたすけてくれるスーパーマンだなあと思いました。

でも、ぼくが二年生さい後の空手のし合の日、さいがい待きで来られなくなりました。ぼくは、どうしても来てほしくて、何どもおねがいましたけど、だめでした。その時ぼくは、父にひどいことを言っしまいました。

「自えいたいなんか大きらい。」

そう言うと、父はぼくをだきしめて、

「ごめんね。がんばってきてね。」

と、やさしく頭をなでてくれました。

ぼくは、どんな時もやさしく大きな父にまもってもらっているんだなあと思いました。し合に来られなかった父のためにぼくは、がんばってこの日、初めてゆう勝することができました。父は、とてもよろこんでくれました。でもぼくは、

「ひどいことを言っでごめんね。」

と、言えませんでした。

父がぼくをいつもまもってくれるから、ぼくもがんばれます。父は、みんなのスーパーマンです。いつも本当にありがとう。大好き。